新たなる組織の紹介

がんサバイバーシップ・デジタル医療学講座

産学連携教授
内富 庸介

医療の理念を行動に変えるプログラムを、行動科学と患者・市民との共創アプローチにより開発し、現場に社会実装します。

2024年4月1日、東京慈恵会医科大学医学部に産学連携講座として「がんサバイバーシップ・デジタル医療学講座」が開設されました。人生百年時代を迎え、合併症や複数の問題を抱えるがんサバイバーが毎年100万人増加しています。サバイバーシップケアの計画次第では、地域医療・介護提供体制が逼迫する恐れがあります。がんサバイバー個人の価値観や集団としての特性に応じた社会保障体制の精密最適化は、世界の喫緊課題となっています。この課題に対し、患者・市民の声に耳を傾け共に創るアプローチと、行動科学に基づくデジタル技術を活用して解決を図ります。

講座設置に至る道のりを振り返ると、1995年に国立がん研究センター東病院（柏市）精神腫瘍学研究部の創設に携わった経験が出発点です。当時の東病院は、日本で初めて全患者にがん告知を開始した病院であり、緊迫した告知後の患者対応に苦慮していました。医師、看護師、医療スタッフが悩みながら対応し、慈恵医大柏病院精神科の先生方の援助を受けつつ、患者および医療スタッフのストレス対策に取り組み始めました。

がん患者への面談調査を行った結果、がん種に関係なく告知自体が共通の中心的課題であることが明らかになりました。その予防策として、患者が望む医師向けの共感的コミュニケーション技術向上を目指す研修プログラム「SHARE-CST」の開発に繋がりました。SHARE-CSTは、医師の共感的コミュニケーション技術を向上させるとともに、患者のストレスも改善し、厚労省の後押しもあって現在までに16万人の医師が修了しています。このプログラムは、日台韓米中の診療ガイドラインや医学教育のコアカリキュラムに採用され、医療現場の人々の行動が変わる瞬間に立ち会うことができました。しかし、コロナ禍により研修は完全に中断してしまいました。

写真左から、野口研究補助員、内富教授、栗栖助教、長谷川研究補助員

時代が変わっても変えてはいけないもの、それは患者と医療者間の温かいコミュニケーションです。一方、時代とともに変えていかなければならないもの、それはデジタル技術による医療です。デジタル技術は現在、身内や仲間、遠くの親戚を結ぶ必須のアイテムとなり、スマホは24時間の伴走者として信頼できるカウンセラーのようになっています。がんサバイバーの高齢化により、がんの疾患だけでなく患者個人の痛みに向き合うケアの重要性が一層増しています。

この度、ご縁をいただいた慈恵医大の理念、高木学祖の言葉「病気を診ずして病人を診よ」が身に染みています。「理念」を医療者の「行動」に変える活動を、世界水準で、一つでも多く創出していきます。また、行動科学と患者・市民との共創アプローチを応用し、デジタル技術で統合した健康プログラムを社会に実装してきた知識と経験を惜しみなく提供していきます。いつでも気軽に声をかけていただける、オープンな講座を目指します。旧外来（A）棟3階でお待ちしておりますので、お気軽にお声がけください。